

## 福岡県におけるバレイショの新奨励品種「ニシユタカ」

誌名	福岡県農業総合試験場研究報告. A, 作物 = Bulletin of the Fukuoka Agricultural Research Center. Series A, Crop
ISSN	02863022
著者	三善, 重信 大賀, 康之 森藤, 信治
巻/号	1号
掲載ページ	p. 35-38
発行年月	1982年3月

## 福岡県におけるバレイシヨの新奨励品種「ニシユタカ」

三善重信・大賀康之・森藤信治

Report on a New Recommended Potato Variety "NISHIYUTAKA"

in Fukuoka Prefecture.

MIYOSHI, S., OHGA, Y. and MORIFUJI, N.

福岡県におけるバレイシヨの作付面積は、昭和55年度春作が1,040 ha、秋作が1,03 haであるが、過去10年間に約40%減少している。しかるに、最近における消費の動向を見ると、外食産業の発達による業務用バレイシヨの需要や軽食加工食品の原料消費が拡大し、需要量はますます増大する傾向にある。このため、県内における生産量の減少は県外からの移入量の増加によって補われている。このような傾向に歯止めをかけるためには、適地適作を基本とした水田裏作への春作導入や転換畑での秋作導入を推進する生産団地の育成と産地化が必要である。

バレイシヨ新品種「ニシユタカ」は春秋二期作に安定して多収性を示し、青果用としても外観、品質がよく食味は「シマバラ」「タチバナ」より遙かに優れている。また、粘質土壌にも適応性を持つため、春、秋作として、水田転換畑における作付体系の組入れが期待されるため56年9月奨励品種に採用したので、試験成績及び特性概要について紹介し普及奨励の参考に供したい。

特性調査並びに生産力検定試験に供試された。その結果本系統は黄肉種で春・秋作ともに多収で中位の澱粉価でありながら食味がよいなど、優れた点が多いため、昭和49年春作後に長系82号、昭和50年秋作後西海15号の系統名が付されて、各地の特性検定試験や系統適応性検定試験に供された。長崎県内でも生産力検定試験や地域適応性試験が実施された結果、春作で特に多収性であり、大いものが多く、外観が美しく、市場性が高いなど優れた点が確認されたので、昭和53年5月バレイシヨ農林23号に登録、「ニシユタカ」と命名された。長崎県では同年、品種登録と同時に奨励品種に採用され、また、岡山県、香川県などでも栽培が広まりつつある。

福岡県では昭和51年春作より奨励品種決定調査に供試した結果、春、秋くり返し植付ができる休眠性を持ち、しかも多収性で目が浅く外観がよい等、優れた点が多いので昭和56年奨励品種に採用した。

品種名は西日本地域に適した豊産性品種という意味に由来している。

### 来 歴

昭和45年秋、長崎県愛野ばれいしょ支場において「デンマ」を母とし「長系65号」を父として交配採種された中から選抜された品種である。昭和46年実生個体の選抜が行われて以来、選抜固定が続けられ、

### 特 性 概 要

#### 1. 形態的特性

春作の茎長は暖地の品種中では短い方に属するが、秋作ではやや長く、茎数は春作、秋作ともに多い方である。茎の太さは茎数の割には太く直立し倒伏せず、草勢は中

第1表 特性調査概要

(長崎県愛野ばれいしょ支場)

品種名	地上部特性					地下部特性								
	草勢	草型	茎		花	皮色	形	目の深淺	外観	肉色	休眠日数			
			色	大小	疎密						大小	開花数	春作産	秋作産
ニシユタカ	やや強	やや拡 直	緑	中	中 やや疎	中	極小	淡黄褐	へん円	浅	良	淡黄	83 <sup>日</sup>	107 <sup>日</sup>
デンジマ	強	やや拡	〃	〃	〃	〃	小	淡黄	〃	〃	〃	〃	64	104
タチバナ	〃	直	〃	〃	〃	やや大	多	黄白	ややだ 円	〃	〃	白	66	110

～強である。葉色はやや濃く葉の着生はやや疎で、葉の大きさは中程度であるが、やや小さめである。

花色は白であるが蕾のうちに落ちるものが多い、開花数も非常に少ないため県内の春、秋作では開花期が認められない。ふく枝の長さは春作が短く秋作ではやや長くなるが、「タチバナ」「シマバラ」などに比べて短く、

いもつきのまとまりは良い。いも形は偏円で目が浅く、外觀はなめらかで美しく上いもの揃いがよいため個数が多い場合は1個平均重がやや軽くなり易い。

いもの色は皮色・肉色ともに淡黄色で見た目にも美しく、重粘土などの不良条件の土壌においてもいもの裂開や亀裂は非常に少ない。

第 2 表 春作におけるほう芽生育並びに病害調査 (福岡農試, 畑作試験地)

品種名	ほう芽期 (月・日)	霜被害	生育株率 (%)	開花期 (月・日)	花色	掘取時 (1株当たり)			病害発生調査	
						草丈(cm)	茎数(本)	茎葉重(g)	ウイルス	疫病
ニシユタカ	3.28	無～中	95.9	—	白	59	1.4	265	無	無～微
デジマ	3.27	無～中	92.7	—	〃	69	1.2	287	無	無～微
タチバナ	3.30	無～微	94.4	5.12	〃	68	1.3	398	無～中	無～中

注：1) 調査期間、昭和51年より55年まで5年平均 2) 調査場所、甘木市三奈木  
3) 栽培様式、2月下旬播種、マルチ栽培

第 3 表 秋作におけるほう芽生育並びに病害調査 (福岡農試畑作試験地)

品種名	ほう芽期 (月・日)	生育株率 (%)	開花期 (月・日)	花色	掘取時 (1株当たり)			病害発生調査		
					草丈(cm)	茎数(本)	茎葉重(g)	ウイルス	疫病	そうか病
ニシユタカ	8.29	88.7	—	白	60	2.1	131	無～微	無～微	無～甚
デジマ	8.27	82.2	—	白	67	1.9	187	無	無	無～甚
タチバナ	8.30	86.7	10.2	白	71	1.2	163	無	無～少	無～多

注：1) 調査期間、昭和51年より55年まで5年平均 2) 調査場所、甘木市三奈木  
3) 栽培様式、8月上、中旬無催芽直播、秋作早植栽培。

2. 生態的特性

春、秋二期作が可能な短休眠品種であるが、春作での休眠期間がやや長く、春作の掘取りが遅れると、秋作での萌芽が遅れ易い。県内春作における萌芽期は「デジマ」より約1日遅れるが「タチバナ」より2～3日早く、秋作では「デジマ」より遅いが「タチバナ」との中間的萌芽性を有する品種である。しかし萌芽揃はきわめて良好である。熟性は春作では中程度に属するが、秋作では萌芽が遅れると中生の晩となり「タチバナ」よりもわずかに早い程度になる。いもの肥大開始は早い方ではないが、中期以降の肥大は良好で、いも数は多く、上いも率は高い。澱粉価は「デジマ」よりわずかに低く、「タチバナ」よりも高い。

3. 病害抵抗性

ウイルス病抵抗性の程度は、特性検定試験の結果、葉巻ウイルスに対する抵抗性はやや弱いようであるが、Y

第 4 表 主要病害の特性検定結果

第 4 表～1 Yウイルス病抵抗性 (北海道中央)

年度	えそ反応		モザイク 又は 無反応
	強	弱	
昭50年	農林1号	ウンゼン	男爵いも
	ニシユタカ	デジマ	セトユタカ
	タチバナ		
昭51年	農林1号	長系83号	男爵いも
	ニシユタカ		セトユタカ

ウイルスに対しては強い反応を示し、葉巻ウイルスに対しても病徴を現わし易いので病株抜取は容易である。軟腐病、粉状そうか病に対しては、中以上の抵抗性を持っているが、そうか病には弱く暖地育成系統の中では「タチバナ」同様弱い方に属するので、そうか病の発生し易い

第4表～2 軟腐病及び粉状そうか病

抵抗性	軟腐病抵抗性(福岡農試)			粉状そうか病抵抗性(長崎, 愛野)		
	昭50年	昭51年	昭52年	昭50年	昭51年	昭52年
強	ニシユタカ 長系83号 長系83号			ビホロトヨシロビホロ ニシユタカ ウルチカ ウルチカ		
やや強	ニシユタカ			シレットコ シレットコ ニシユタカ ビホロ デジマ		
中	ニシユタカ デジマ デジマ 農林1号 農林1号 農林1号 デジマ			北海50号 ニシユタカ タチバナ デジマ シマバラ タチバナ シマバラ		
やや弱	男爵いも 男爵いも			長系80号 北海57号 北海57号		
弱	男爵いも			長系79号 オオジロ 紅丸 セトユタカ ウンゼン 西海10号		

土壌や、常習的な発生地帯では作付を避ける必要がある。疫病抵抗性の遺伝因子は持たないとされているが、県内圃場での発病率は低く耐病性は菌系によると思われるが「タチバナ」「デジマ」と同程度か、やや強いと考えられる。

第4表～3 そうか病抵抗性(長崎, 愛野)

項目	昭51年		昭52年	
	春作	秋作	春作	秋作
ニシユタカ	450	108	75	124
デジマ	75	87	101	100
タチバナ	100	100	100	100
シマバラ	—	59	73	41

注：タチバナを100とした罹病度指数で示す。

第4表～4

疫病抵抗性(長崎, 愛野)

項目	昭50年	昭51年
ニシユタカ	中	中
デジマ	弱	弱
タチバナ	弱	弱
シマバラ	—	中

第5表 生育追跡調査 (長崎県愛野ばれいしょ支場)

作期	品種名	収穫日	地上部		ふく枝		上いも		同左標準比		上いも澱粉価		備考
			茎長(cm)	重(g)	長(cm)	数(本)	個数(個)	重量(g)	個数(%)	重量(%)	1個重(g)	(%)	
春	ニシユタカ	1	27	105	14.4	10.1	—	—	—	—	—	—	試験は50～52年の平均値 植付け, 3月5日 収穫日
		2	44	196	14.0	12.0	4.5	200	192	41	46	8.8	
		3	49	163	13.6	9.7	5.5	487	144	100	90	12.2	
作	タチバナ	1	25	102	15.1	7.4	—	—	—	—	—	—	1～5月6日 2～5月25日 3～6月15日 (株当り)
		2	47	234	19.2	7.7	2.8	108	102	28	39	7.9	
		3	61	230	20.7	11.0	4.2	389	115	100	92	10.7	
秋	ニシユタカ	1	22	72	3.1	10.0	—	—	—	—	—	—	試験は50～52年の平均値 植付け, 9月2日 収穫日
		2	47	200	3.8	13.8	4.7	216	88	46	49	10.4	
		3	48	171	3.9	13.2	4.9	473	116	100	97	12.7	
作	タチバナ	1	23	84	2.5	12.5	—	—	—	—	—	—	1～10月4日 2～11月1日 3～11月29日 (株当り)
		2	47	253	3.2	18.0	4.3	238	84	51	58	10.0	
		3	46	191	3.9	16.5	4.4	464	112	100	109	12.9	

4. 食味並びに調理特性

蒸しいもの食味は暖地育成品種の中で最も良いとされている「デジマ」に次ぎ「タチバナ」「シマバラ」より常に優れた食味を示した。水煮後の肉色はやや粘質で煮

くずれが少ないので長時間加熱する料理に適するが、粉ふきいもの状態はあまり良くない。そのほかの調理特性や加工適性は一長一短があり適否は普通とされている。

第 6 表 春秋作における収量調査

(福岡農試畑作試験地)

項目 品種名	春 作 収 量					秋 作 収 量				
	a 当たり上いも (30g 以上)					a 当たり上いも (30g 以上)				
	個 数 (個)	重 量 (kg)	上いも 歩合 (%)	上いも 重合 量 (%)	上いも 収比 平 均 重 (g)	個 数 (個)	重 量 (kg)	上いも 重歩 合 (%)	上いも 収比 平 均 重 (g)	上いも 1個 重 (g)
ニシユタカ	2514	284.8	94.1	112.9	113	1809	253.7	97.8	110.6	140
デ ジ マ	2146	252.2	94.6	100	118	1529	229.4	98.0	100	150
タチバナ	1360	178.9	89.2	70.9	132	1408	210.9	98.5	91.9	150

注：収量調査は昭和 51 年より 55 年まで 5 年間の平均値

第 7 表 現地試験における生育、収量調査

(福岡農試畑作試験地)

作付時期	品種名	ほう芽 期 (月・日)	生育株 率 (%)	株当り 茎葉 重(g)	疫病被 害程度	a 当たり上いも収量			上いも 1 個 平均重 (g)	上いも 収量比 (%)
						個 数 (個)	重 量 (kg)	歩 合 (%)		
昭和 56 年 (春作)	ニシユタカ	3.28	94.7	255	微	2928	273.5	91.3	93	119
	デ ジ マ	3.29	92.3	132	無	2572	229.7	89.1	89	100
	シマバラ	3.23	95.2	85	微	2603	230.4	87.8	89	100

注：調査場所：筑紫野市大字山家（水田裏作）

## 5. 春、秋作における収量性

春作マルチ栽培（2月下旬植付5月下旬収穫）における上いも収量は、過去5か年平均で284.8kg/aで「デジマ」より約13%「タチバナ」より約5.9%多収で春作では極めて高い収量性を示した。秋作早植栽培（8月上旬定植11月中旬収穫）においても平均収量253.7kg/aで「デジマ」より約11%「タチバナ」より約20%多収で、早植により生育日数を確保することで秋作でも多収性を示した。概して収穫後期に収量が著しく増加する特性を持っている。また、春秋作ともに上いも個数が多いため1個平均いも重は「デジマ」よりわずかに軽い。全収量に対する上いも重歩合は「デジマ」と大差なく、春作では「タチバナ」より多収で、屑いも率は普通程度である。

県内現地試験でも場内試験（於、甘木市三奈木）と同様の傾向で「ニシユタカ」が優れた収量性を示した。

## 栽培普及上の留意点

1. 春、秋二期作ができる短休眠品種であるが、特に春作で多収をあげ易い。いもの早期肥大性はないが、後半の肥大が大きいため、マルチ栽培の5月掘では多収性である。早期収量を高めるためには、温蔵、浴光でもの休眠明けを早め種いもの命を進める必要がある。

2. 春作産では休眠日数がやや長いので秋作用種子は5月末までに掘取り早植することで収量が増加する。

3. 茎は太く萌芽揃はよいが、茎数が多いので、早掘栽培で太いものをわらう場合は茎数を早目に整理する。

4. バレイシは重粘土で育ちが悪く障害を受け易いが「ニシユタカ」は亀裂が少なく栽培適応性が高い。

5. ウイルス病に対しては病徴を現わし易いので、罹病株は早期抜取を行い、アブラムシ防除を徹底する。

6. そうか病には弱いので発生地での作付を避け、石灰等の多量施用や、極端な土壌pH矯正は行わない。

7. 普通栽培では春作したいもを秋作種子として利用できるが、繰返し作付すると、ウイルス病その他、種いもの病害汚染率が高くなり、生産力が落ちるため種子更新は年1回必ず行うようにする。

## 参 考 文 献

- 1) 知識叢道 (1979) : 農業技術, 33, 11, 509-510. バレイシ新品種「ニシユタカ」について
- 2) 知識叢道他 4 名, (1979) : バレイシ新品種決定参考成績書, 長崎県総合農林試験場愛野ばれいしよ支場。
- 3) 福岡農林統計協会 (1977~1981) : 福岡農林水産統計年報, 第25次, 26次, 27次。